The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語が上達した中国人研修生の日本語学習アプローチ
Author(s)	栄, 苗苗
Citation	阪大日本語研究. 2016, 28, p. 143-163
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55453
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』28（2016）

日本語が上達した中国人研修生の日本語学習アプローチ

Approaches to learning Japanese by a Chinese technical trainee who has acquired an advanced level of Japanese

栄 苗苗
RONG Miaomiao

キーワード：外国人研修・技能実習制度　外国人研修生　日本語学習　学習リソース　自律学習

要旨

本稿は職業上の技術・技能・知識の修得という名目で来日し、最長3年間の期間で、働いている外国人（以下研修生と呼ぶ）を対象としたものである。研修生に関する従来の研究は主に研修生をめぐる社会問題（過労死、低時給、人権など）であった。研修生の日本語学習に関する研究は少ない。本稿では日本語が上達したある研修生の日本語学習アプローチに焦点を当て、この研修生はどのように仕事をしながら日本語を勉強したかを明らかにする。分析の結果から以下の2点がわかった。①研修生の日本語学習において、自分なりに自律学習を行うことが学習の継続と上達への重要な鍵である。②日本語学習には言語知識の習得以外にも、研修生活の中のストレスの軽減、精神的自由の獲得、将来への自信を育てるなどの意義がある。

1. はじめに

私は大学を卒業してから、中国のある研修生仲介会社で、日本語教師として半年ぐらい働いていた。そのとき、3年間の研修を経て日本語が上達した研修生のことを初めて知った。留学生と違い、研修生の役目は仕事である。このように仕事をしながら、学校で勉強している留学生と同じように日本語能力試験の一級、二級に合格した研修生は日本で、恐らく自主的な学習をしていたのだろう。彼らはどのように自主的に日本語を勉強したのか。その人たちの日本語学習アプローチに興味が湧いてきた。

2. 研究背景

2.1. 研修生の定義

JITCO[1)]「外国人研修・技能実習制度概説」（JITCO ホームページ）によると、外国人研修生とは「研修」の在留資格[2)] で入国を許可されている者である。外国人実習生とは技能実習制度[3)] の対象者であり、研修により一定水準以上（日本の技能検定試験「基礎2級」相当以上）の

技術等を修得した者である。

また、2009年7月、出入国管理及び難民認定法（以下「入管法」と略す）が改正され、改正入管法によると、2010年7月以降に来日した外国人労働者は来日後の研修期間が取り消されて直接「技能実習生」となり、労働関係法令の保護が受けられるようになった。

本稿では、産業上の技術・技能・知識の修得という名目で、最長3年間の期間で、日本で働いている外国人を研修生と呼ぶ。研修生と言う呼び方を使う理由は2つである。一つ目は、本稿のもとになった研究の協力者の半分は入管法改正以前に研修生として来日したからである。二つ目は、実習生より研修生のほうが一般的によく知られていると考えるからである。よって本稿で取り上げたCさんは「技能実習生」として来日したが、研修生という呼び方を使った。

2.2. 研修生をめぐる社会問題

日本の外国人研修制度は、元々「開発途上国の人々が来日して研修することで、日本の先進的な技術や技能を学び、帰国後、母国の技術発展に貢献するもの」（「中国网」2010.07.23）であるが、日本国内の深刻な労働力不足にともない、きつい仕事、汚い仕事、危険な仕事といういわゆる3Kの仕事に従事する人が少なくなる中、研修制度は、一部の違法企業や個人が安価な労働力を募集してそこから搾取する重要な手段となっているケースも多い。法務省の発表によれば、2008 年の「外国人研修制度・技能実習制度」の不正行為件数は、過去最多の452 件となっており、その内訳は、「所定時間外作業」169 件、賃金の不払いや案管理義務違反などの「労働関係法令違反」155 件、本来の受入先と異なる企業に外国人研修生・実習生が派遣される「名義貸し」96 件、届け出内容と異なる作業をさせている「研修・技能実習計画との齟齬」48件となっている。過労死、不当な低賃金労働、「名義貸し」、強制貯金・パスポート取り上げ・研修生賃金の違法使用[4] などによる人権・権利侵害という4つの問題は外国人研修生・実習生をめぐる問題の中でよく指摘される。

研修生をめぐる社会問題に対して、「外国人技能実習制度」を廃止するべきだという声が日本社会にはずっと存在しているが、日本政府は「外国人技能実習制度」を廃止していない。廃止するどころか、2020年東京五輪を控えた建設工事での人手不足を埋め合わせるために、国土交通省が2014年11月に発表した『外国人建設就労者受入事業に関するガイドライン』によると、2015年4月1日から2021年3月31 日まで建設分野の技能研修生の滞在期間が3年から5年に延長された。制度の廃止による外国人研修生・実習生をめぐる問題の解決は近い将来には期待できないということである。

2.3. 研修生の教育に関する先行研究

研修生の日本語教育において、杉山（1999）は、日本での日本語講座についての中国人研修生の感想・評価をアンケート調査を通じて明らかにした。14名の中国人研修生へのアンケート調査によると、日本での日本語講座は研修を受けるのに役にたったが、学習時間の不足が問題であるということがわかった。佐藤（2000）は、来日後の中国人技術研修生13名への日本語研修の授業の流れを記録し、1日の研修時間が長すぎるために、教師、学習者共に集中力が継続できなかったこと、また、研修生は日本語の音に耳が慣れるに従って、聴く力が高まるのが一般的だということなどを指摘している。赤塚（2005）は、ベトナム人研修生・実習生を対象とした話し合いや聞き取り、および日本語の授業記録を通して調査を行い、人間関係構築のための努力が重要であること、また、ベトナム現地と日本側との連携には、距離、体制の相違などの問題があり、改善の余地が残されていること、そして、発言の前後関係、その場の状況、相互の人間関係などの関連性が理解されたうえでないと本当に相手を理解したとはいえないこと、さらに、機能・場面シラバスを中心とした指導の中では、学習者同士が「学びあう」姿勢が浮かび上がってこないことなどを指摘した。赤塚（2008）は、2006年に実施した調査を分析し、研修生の生きたことばを、教室へ取り込み体系化していく取り組みが必要だと指摘している。御舘（2007）は、研修生と、日本語教室の担当職員や講師、研修生の受け入れ企業の担当者の語りを照らし合わせ、研修生の日本語と地域の日本語教室という場がどのように語られ、構築されているかを述べた。また、個々の研修生において、現在の生活や将来の描き方、日本語学習の位置づけ、自己のカテゴリーの位置づけが相互に関連し、包括的に「自己」が構築されていると述べている。葛（2007）は、中国人研修生の異文化適応性について論じて、日本語が通じないため、仕事上で日本人とうまくコミュニケーションが取れないことを指摘した。中国国内の研究では、梁（2007）が、中国研修生派遣前の日本語教育に焦点を当て、研修生派遣前の日本語教育の特徴、注意点、研修生を対象とする日本語授業の技術などについて述べている。

上記の先行研究を読んで、研修生の日本語学習に関する研究では日本語講座や日本語研修の授業に関することが多く、研修生が日常生活の文脈で日本語を勉強する状況の研究がほとんどないことに気づいた。そして、日本語教室や研修生の日本語集合研修授業には、時間と回数の制限があるため、授業だけを通じて研修生が本当に日本語を身につけることができるのかという疑問も生じた。

3. 研究目的

本研究は、日本語が上達した研修生の日本語学習へのアプローチを通じて、彼らの学習状況

を理解することを目的としている。過労や安い時給などの問題が多いという現実の中で、日本語が上達した研修生は仕事をしながら、限られた時間、リソースを利用し、日本語を勉強した。彼らの日本語学習は、恐らく自律学習だろう。その人たちの日本語学習へのアプローチを明らかにすることで、他の研修生の日本語学習に役立つことが期待できる。日本語能力が身につけば、長期間日本で生活する中で、活動の幅が格段に広がり、研修生活が豊かになり、日本での生活を少しだけでも楽に過ごせるようになるだろう。そして、問題が生じたときにも、自分の意見や要求などを相手に知らせることができ、問題の解決を助けるだろう。

4. リサーチクエスチョン

日本語が上達した中国人研修生は、仕事をしながら、どのように日本語を勉強したのか。

5. 研究方法

本研究では、「質的ケース・スタディ」という研究手法を用いる。ケース・スタディとは、個人、集団、制度、地域社会といった社会的単位の、集約的な記述と分析である（メリアム2010）。ケース・スタディは心理学、社会学、人類学、政治学、経営学などの分野において、広範に利用され、教育の分野でも研究方法として普及している。

ケース・スタディは「状況の深い理解と、そこに関わる人たちにとっての意味を把握することがねらわれる。関心の対象は、結果よりはプロセスに、ある特定の変数よりは文脈に、確証よりは発見におかれる。ケース・スタディから引き出された洞察は、政策や実験や将来の調査に直接的な影響を及ぼしている」（メリアム, 2004, p. 26）。

本研究は日本語が上達した研修生を事例として、その学習のアプローチを記述し、分析を行うことにより、日本語が上達した研修生の学習アプローチを理解することであることから、ケース・スタディは、本研究の目的に合致した研究方法であるといえる。

6. 調査デザイン

6.1. 日本語が上達した研修生について

『大辞林』によると、「上達」という言葉は「技芸が上手になること」である。しかし、「上手」の程度は人によって、違うだろう。本研究における「日本語が上達した研修生」は、研修を経て、「日本語能力試験」[5] N1、N2（あるいは一級、二級）に合格した研修生と操作的に定

義する。

6.2. 調査概要

本研究の調査対象は、研修期間中に日本で「日本語能力試験」を受けてN1、N2（あるいは一級、二級）に合格した者を選定した。本稿で取り上げるCさんは2012年03月～2015年03月に日本で働いていた中国人研修生である。半構造化インタビューによりデータを収集した。半構造化インタビューは、一定の質問に従い、面接を進めながら、被調査者の状況や回答に応じて面接者が何らかの反応を示したり、質問も順序や内容を臨機応変に変えることのできる面接法である。構造と若干の自由度を併せ持つことで、ある方向を保ちつつ、被面接者の語りに沿って情報を得ることができる（保坂・中澤・大野木, 2000）。したがって、何について質問すればいいかがある程度は把握できるが、調査対象からどのような回答が得られるかが予測できない場合に適している。また、半構造化インタビューはインタビュー中に協力者の話により、新たな質問を加えることもできる。本研究では、日本語が上達した研修生の学習アプローチを探る研究なので、協力者の学習アプローチについて、できるだけ詳しく、自由に語ってもらう必要がある。この点から半構造化インタビューは本研究に相応しい方法であると考えられる。

Cさんのデータは3回の電話インタビューと、1回のチャットによるインタビューを通じて収集した。筆者と協力者Cさんは共に中国語母語話者なので、4回のインタビューは全部中国語で行った。インタビューする前にCさんの承諾をもらい、電話インタビューは録音した。

データに関する情報は下記表1の通りである。

表1　インタビュー協力者

協力者	性別	年齢（来日時）	職場	インタビュー日	インタビュー方式	録音時間
Cさん	女性	10代後半	工場	2013.03.24	電話インタビュー	58分
				2013.07.22	電話インタビュー	30分
				2015.07.30	電話インタビュー	42分
				2015.08.12	チャット	30分

6.3. 分析方法について

筆者は録音データを文字に起こして、逐句分析を行った（チャットの内容も文字化された音声データと同じ扱いで、逐句分析を行った）。まず調査協力者の発言を意味ごとに区切った。続いて似ているものを一つのグループにしてカテゴリー名をつけた。そして似ている要素を集め、より抽象的なカテゴリーを作った。それから、もっと抽象的なカテゴリーを作り、似てい

る要素を集め、各要素の関係を明らかにするコンセプトマップ（付録）を作った。その後インタビュー・データをさらに読み返し、カテゴリーのふさわしさと各要素の関係を確認した。最後に分析結果をストーリーとして書いた。

6.4. ストーリーの記述について

本稿では第1人称でストーリーを描いた。第1人称で記述する理由は二つある。まず、ストーリーは語り手と聞き手の相互行為からうみだされたものである（やまだ, 2000, p. 23）。Cさんのストーリーは筆者である私と協力者Cさんと二人で構築されたものであり、作成者である一人として第1人称で記述したほうが自然だと思うから、第1人称を使った。2番目の理由は第1人称は第3人称より読者が共感しやすいだろうと考えたためである。

7. Cさんのストーリー

7.1. 高校を辞めた後

私は高校2年生の時学校を辞めた。理由は経済的な理由でもなく成績が悪いという理由でもなかった。ただ飽きたという理由からだった。私は高校で一生懸命勉強していい大学に入り、卒業してからいい仕事を探すという決められた人生が嫌いだ。私にとって将来偉い人になれなくても、いい仕事が見つからなくても、自分なりに楽しく生きていければそれで十分だ。しかし、周りの人は誰も私の考えを理解してくれなかった。私は成績がなかなか良かった（学年700人中いつも100位より上）こともあって、先生や両親から学校を辞めることを諦めなさいと何回も説得された。その時はプレッシャーがいっぱいあり本当に辛かったが、私は自分で決めたことを絶対に貫くタイプだから、最後まで自分の意思を通して学校を辞めた。

学校を辞めたら海外を放浪しようと思っていたが、現実と理想の間にはやはり差があって、両親のことやお金の問題などを考えて結局、海外を放浪する夢をあきらめた。私は一人っ子であり、家の経済状況もそんなに悪くないから、家でのんびりして過ごしても両親には文句を言われなかったが、現実の社会に出たいので、学校を辞めてからアルバイトを始めた。特にやりたい仕事がなかったので、服屋の店員をしたり、パン屋でパンを作ったりした。その時は仕事で大変疲れたが学校より楽しかった。しかし母は、私が外でいったいどんな仕事をしているのか、またどんな人と一緒にいるかよく分からないので、ずっと私のことを心配していた。そんな時、母は私のいとこのことを思い出した。彼女は日本へ行って働いていたことがある。母は彼女から日本で働くことをいろいろ聞いていた。「どうせ仕事をするなら、日本の方がいいかもしれない。遠いけれど少なくとも娘がどこで何をしているかははっきり分かる」と母は思っ

た。私も若いうちに外に出て違うことを体験したほうがいいと思っていたので、「日本へ行ってみたら」と母に言われたときに賛成した。

日本へ行くことを決めた後、私はある送り出し機関の求人広告に応募した。面接に合格した後、送り出し機関の日本語研修コースに入って初めての日本語学習が始まった。

7.2. 出国する前の日本語学習

送り出し機関の日本語研修は3か月だった。その期間に『みんなの日本語』という教材を使って、授業―宿題―自習というモードで日本語を勉強した。授業は高校の英語の授業とほぼ同じだった。先生が文法、文型、本文などを説明してから、宿題を課した。残った時間は自習をする。

正直に言えば、その時の授業はちょっとつまらなかった。毎日授業と自習ばかりで、教材の内容も面白いものとは言えない。一緒に勉強している人の中には自分はお金のために日本に行くから、日本語の学習なんてどうでもいいと考えている人もいた。その人たちはしっかり日本語を勉強するわけではなかった。しかし、私は彼らと違った。そもそも私はお金のために日本へ行くのではない。私から見れば、3年間でもらえるお金はそんなにたくさんではない。そして家の経済状況もそれほど悪くないので、家計のために頑張らなければならないストレスもない。私にとっては日本へ行って日本語を勉強することは大切な目的だった。自分はまだ若いしせっかくの学習のチャンスなのに、利用しないと惜しいと考えていた。それに日本のアニメ、漫画、ドラマが好きなので、日本語の学習にも興味が沸いた。

だから日本へ行く前の日本語研修はちょっとつまらなかったけれども、それを十分に利用してしっかり日本語を勉強した。日本語研修中に定期的にテストを行っていた。三か月の勉強を通じて私は最後のテストでN4くらいのレベルに達した。しかしその時は「あなたの趣味は何ですか。」などの簡単な日常会話がわかる程度だった。

7.3. 来日後の日本語学習

2012年3月私はほかの研修生と一緒に日本に来た。

7.3.1. 会社の日本語教室

私の所属する会社には中国人研修生が100人以上もいた。そのせいかもしれないが、会社は研修生の日本語教育に力を入れており、研修生の日本語学習のために日本語教室を設置していた。毎週日曜日に会社の研修室で日本語の授業を行っていた。法律の規定により研修生の日本語レベルはN5に達しなければならないので、みんな1年目の日本語授業に出席しなければな

らない。2年目からの授業は個人の意志により出席は自由であり、主にもっと高いレベルの能力試験を目指す研修生がこの授業を取る。1年目、2年目共に日本語能力試験対策の授業なので、内容は試験問題に関するものだった。

私は毎週日曜日の午前中に他の研修生と一緒に会社に行って授業を受けていた。1年目の研修生と2、3年目の研修生は時間別に授業を受けた。授業の時間は大体1.5時間くらいだった。授業は能力試験対策なので私たちがまず試験問題集をして、残った時間は先生の説明時間だった。先生が説明するのは主に文法の知識でありしかも授業ではN1に対する説明がないので、試験（特にN1）に合格したいのであれば自分の努力で勉強しなければならない。自分で頑張らないと受かるのはなかなか難しいことだった。

2年目の時私は会社の授業にだんだん出席しなくなった。なぜかというと授業の内容はほとんどわかっているものであり、N1向けの試験対策もないからだ。授業に出席しなくなったが、私は毎週教室に行って出席をとったり、資料をコピーしたりして、先生の手伝いをやっていた。

7.3.2. 授業以外の試験対策

1年目の12月の能力試験でN5に合格しなければならない規定があるが、国内にいたとき私はすでにN4くらいのレベルに達していたので、7月にはN4試験を受けると自分で決めた。9月に成績が発表され、私は180点満点中176点を取った。頑張って勉強すれば自分の能力ならN2も多分合格できると思った。それにN3に合格しても意味があまりないから、12月にN2の試験を受けることを決めた。

試験に受かるために毎週1.5時間の授業だけでは不十分なので、私は時間ができればいつも試験問題をやっていた。試験問題は自分で準備した試験問題集もあれば、先生からもらった問題集のコピーもあった。自分で準備した問題集は全部中国から持ってきた本だった。日本に来る前から既に日本で能力試験を受けることを決めていたので、N1・N2の試験問題集をたくさん準備していた。

試験対策とはいえ決まった手順による試験準備は嫌いだった。過去の試験問題でも模擬試験問題でも、最初の問題から最後までやりきったことはほとんどなかった。私は読書が好きなのでよく読解や他の本を読んでいた。読む量が増えると、語感が自然に身についてきた。私は文法の練習も毎日数時間かけて単語を暗記するのも嫌いだったが、文法の知識は絶対に学ばなければならない。それは試験のためだけではなく日本語の勉強のためだ。私は先輩にもらった『中国語版日本文型辞典』と『標準日本語』という本を使い文法を学んだ。特に『中国語版日本文型辞典』はすべての日本語の文法を網羅したとてもいい本だった。会社では2時間ごとに短い休憩時間があるので、私はその時間を利用してよく『中国語版日本文型辞典』を読んでいた。

単語を暗記することもやっていたが具体的な計画はなかった。暗記するのは気持ち次第だった。一日一ページだけに集中して覚えたこともあるし、一日に複数のページを読んでも一個も覚えていなかったこともあった。しかし、続けていると頭の中に印象が残るようになった。特に能力試験には単語の詳しい使い方がほとんど出ないし試験問題も全部選択問題なので、単語の意味と使い方を全部覚えていなくても正しい答えは何となく選び出せる。

聴解対策については、聴解問題はしなかった。特に N2 の試験を準備している時、私は半年ぐらいしか勉強していない初心者であり N2 の聴解問題を聞いてもわからなかった。しかし聴解練習をしなかったわけではない。聴解を練習する時、私は問題を解かずに答えのページを開けて音声の原文を見ながら聞く。そして私は朗読が好きなので原文を読みながら声を出して朗読した。これを通して聞き取りだけではなく、話す能力も上がってきた。

このような自分なりの試験対策と普段の日本語学習を通じて、私は無事に N2 と N1 の試験に合格した。

7.3.3. 他人に聞かずに自分で勉強する

日本人と話す時何かわからない言葉が出たらその場で相手に聞くが、試験問題をする時にわからない問題があってもあまり他人に聞かなかった。その理由は二つある。まず、試験問題集は全部解答付きなので、解答を読めばほとんどわかる。そして性格にも関わっているかもしれないが、私は根掘り葉掘り聞くタイプではない。だからわからない所があっても意味が大体わかれば、それで OK にした。私の目から見れば一つの問題や文法に注目するなんてただ時間の無駄だ。

7.3.4. 日本語学習サイトの利用

寮にはインターネットを使う人がいるので、たまに他の人のインターネットを利用して日本語を勉強した。自分のインターネットサービスのアカウントを作りたかったが、当時[5)] の私は日本の成人年齢に達していないのでできなかった。

インターネットが使えるときに私はよく「沪江日语网」というサイトを使っていた。「沪江日语网」は中国で有名な日本語学習サイトであり、中にはたくさんの日本語リソースがある。私がよく使うのは聞くことに関するリソースだった。「沪江日语网」から NHK のニュースやラジオドラマなどを MP3 にダウンロードした。能力試験の準備をするときだけではなく、寮にいる他の人がうるさいとき、本を読み飽きたとき、それから特に理由がなくただダウンロードしたものを聞きたいとき、それらを聞いていた。

文法の本と同じようにこのような聞く練習も単に試験のためではない。N1 の試験が終わっ

てからも私はダウンロードしたリソースを聞き続けている。私にとってリソースを聞くのは試験対策であり、日本語学習の手段であり、趣味でもあった。

7.3.5. アニメ、漫画とドラマ

能力試験に合格することは大切なことだが、私は単に試験に出る日本語を学んでいたわけではない。試験対策以外にもアニメ、漫画とドラマを利用し日本語を勉強していた。寮にはテレビも設置されていたがあまり使わなかった。2年目の時、20歳になった私はiPadを買った。インターネットが使えるので、ネットからドラマとアニメをダウンロードして見ていた。私はずっと昔から日本のドラマが好きで、特に日本のドラマの男の主人公が私のタイプだった。アメリカドラマのようなヒーローではなく、中国のドラマのような毎日暮らすために苦労しているような人物でもなく、日本のドラマの男の主人公は、ほとんどが私の大好きなドラマ「薔薇のない花屋」の主役のようにとても優しい。

ドラマだけではなく日本のアニメ、漫画も好きだ。特に『NANA』や『蟲師』、『夏目友人帳』などのような漫画が大好きだ。日本に来てから、私は『NANA』の漫画全巻を買った。暇な時によくそれを読んでいた。

ドラマでもアニメ、漫画でも個人の趣味として好きなので、日本語学習のためにそれを利用するというより、むしろ好きなドラマとアニメ、漫画を見るとき、ついでに日本語を勉強していたという方がふさわしいかもしれない。私にとってはそれらを見る時はストーリーの内容が最優先だ。私はできるだけ日本語字幕付きのものを選んだ。キャラクターの話すスピードがとても速くて聞き取れなかった時、字幕を見ながらしっかり話の内容を聞けば意味が大体わかるようになった。漫画を読むときにも同じように、私はすべてのわからない単語を調べるのではなく、内容の理解に重要な単語だけを辞書で調べた。

会社の所在地は田舎で人が少ないし周りは中国人ばかりなので、普段の生活で日本人と話すチャンスは少なかった。私はドラマとアニメ、漫画を通して、日本語の会話で使う言葉をたくさん学んだ。

7.3.6. 読書

私は本を読むのが好きで、時間がある限り漫画や小説などを読んでいる。これがもしかすると能力試験の問題をあまりやっていなかったのに合格した理由の一つかもしれない。

2年目のとき私は三島由紀夫の作品集に出会った。ある日コンビニの近くにあるゴミ捨て場に捨てられた本の中で『三島由紀夫作品集』を発見した。今まで読んだことのなかった日本文学の本だと分かって、私はそれを拾って持ち帰った。毎日ではないがたまにその本を出して読

んだ。漫画とは違い本格的な日本語だった。全部は理解できなかったが面白かった。三島由紀夫作品集と一緒に一冊の「英和辞典」も拾って持ち帰った。『三島由紀夫作品集』と同じようにあまり読まなかったが、時々それをめくって英語と日本語を対照して読む時に「なるほど、英語の○○は日本語でこうだったのか」と分かる瞬間が楽しかった。

読書が好きなので、休みの日私はよく近所の本屋に行っていた。文庫本の小説がたくさんあるので、夏のバーゲンのうちに私は興味がある本を何冊も買って読んだ。日本に来たばかりの時、小説どころか『NANA』の漫画の内容もよくわからなかったが、1年の勉強を通して2年目の時には小説を読んでわかるようになった。文学的な本は漫画と違って日常生活であまり使わない言葉がいっぱい出てくる。このような言葉の読み方をたまに間違えることもあったが、理解の面での問題は少なかった。

そして会社の近くにある図書館を見つけてからはよく図書館に行くようになった。図書館は17:00時閉館なので仕事がある日には行けなかった。休日に時間があれば私は図書館に行った。図書館で好きな本を読むのはとても楽しかった。

7.3.7. 高卒認定試験

日本に来ていつ頃から起こった考えなのかはもう忘れたが、私は3年の研修が終わったら[7]日本の大学に進学したくなった。私は中国では高校を途中で辞めってしまったので、卒業証書を取れなかった。だから日本の大学に進学するために、高卒認定試験を受けなければならなかった。3年目のときに私は高卒認定試験の受験準備をしてそれを受けた。

なぜ3年目かというと、試験を受けることを一度諦めたことがあるからだ。会社の所在地は日本の田舎だが私はここの雰囲気が大好きだ。このような静かで綺麗なところで暮らすのが嬉しいと思っていた。このような日本が大好きだったが、1年を経て最初に来た時の新鮮味がなくなった。旅行に行くことも考えたが、研修生である私は外に出るのがなかなか難しい。会社の所在地以外の場所に行きたいなら、電車で30分以内でいけるところでも会社に申請を出さなければならない。会社は研修生に責任を持っているという会社側の立場はわからないわけではないが、私は外出の申請がいやだった。自分が監視されているみたいな気がした。特に会社側は外出したい人は遊ぶことばかり考えている人なのだというステレオタイプを持っている。申請せずに外出することも考えたが、周りの人に何か言われたり、会社に報告されたりするのが怖くて、やらなかった。それに加えてお金の節約も考えていたので、2年目の私は毎日同じ仕事を繰り返す生活をしていた。それはつまらなかった。同じ仕事を繰り返す生活がつまらないと感じた私は高卒認定試験にもやる気を出せなかったので試験を受けるのを諦めた。

3年目の時自分の考えはまた一変した。日本に来るのも離れるのも勝手にできることではな

いから、ここにいる時間を楽しもう、いろいろなことを試してみようと考え、日本語学習以外に旅行したり、英語を勉強したりした。3年目の時、会社の外出の制限が実は法律違反だったので、会社は申請なしの外出に対してはそれほど厳しくないということがわかった。そして、周りの人は報告とかしないことも分かったので、近くにある都市や少し離れている都市に数回行った。

いろいろなことを試してみようと考えたので、3年目に高卒認定試験にチャレンジする気持ちが戻って、願書を出した。高卒認定試験はどんなものなのか、どんな科目があるのかなど試験に関することは自分でインターネットで調べたり生活指導の先生に聞いたりした。そして工場で一緒に働いている日本人のおばさんは子供が高校生だったことを思い出し、そのおばさんに頼んで、お子さんが使った本を貸してもらった。しかし、ちょっと試してみる気持ちしかもっていなかったので私はそれらの本をちゃんと利用してしっかりとした受験勉強はしなかった。その代わりに、私は図書館に行って日本の歴史の本などを読んで楽しんでいた。当たり前だが高卒認定試験の結果はダメだった。しかし、意外なことに8科目の中で、地学という科目だけが不合格だった。残念な気持ちは少しあったが、受験勉強をちゃんとしていなかったから悔しいとは感じなかった。

7.3.8. 日常生活での話す練習

1年目の時、私は日本人の誰にあっても、その人と話したい、日本語を練習したいという気持ちが強かった。その時私は地元で出会った日本人にも会社の日本人にもよく声をかけて、自己紹介や自分の故郷の紹介をしていた。当時私の日本語は下手だったが日本人とあって話して嬉しかった。しかし、それは1年目の時だけだった。3年目の時私はそのようなことをしないようにした。3年目の時の私は1年目の時のような勇気がなくなった。自己紹介や故郷の紹介をしたら、相手からうるさいなあ、何を言っているのと思われるかもしれないと思った。

とはいえ、日本人とコミュニケーションのチャンスがあったら話をする。例えば、3年目に会社の所在地から電車で30分くらいの都市に行った時、日本人の読書会に1回参加した。その日私はコーヒーを飲むつもりである喫茶店に入った。注文したコーヒーを持って私は店の2階に上がって、読書会をしている人たちにあった。正直に言うとその一瞬ちょっと驚いた。下で注文した時、2階には読書会をしている人がいると店員から聞いたが、離れているテーブルにすれば、互いに影響をしないだろうと思って、私は上に上がった。しかし2階は思ったよりずっと狭いところだった。読書会の人は私を読書会に参加したい人だと思ったみたいで、「いやだと思ったら途中で帰ってもいいよ」と声をかけた。だから私は空いている席に座って日本で初めての読書会をした。その読書会は料理に関するものだった。最初のとき、聞き取れなかったら

どうしようとドキドキしたが、しばらく聞いてみたら話している内容がほとんどわかったから安心した。そして私も会話に参加し、とても楽しかった。

この読書会をきっかけに私は友達を作ることが嫌いなのではなく、日常生活の挨拶以外のことについて話し合える人と友達になりたいのだと気づいた。

7.4.「一人」暮らし

7.4.1. 一人の方が好きになった

私の所属する会社には研修生がたくさんいたので、研修生の生活指導員もいた。仕事でも生活でも何か問題があれば生活指導員と相談する。指導員は日本人だが中国語が堪能で何かあった時は研修生は中国語で彼女に訴えた。しかし、100人以上の研修生がいて生活指導員1人ではなかなか対応できないので、指導員の補佐として研修生の中からリーダーを選びだした。

同期生の中で私の日本語が一番上手なこともあって私はリーダーに選ばれた。誰かが病気になったり、寮の掃除をしたりするときはリーダーの出番だった。今はもう慣れたが、初めてのとき何をすべきか、問題があったらどうすればいいかなどよく分からないので大変だった。3年生のリーダーの先輩の指導で少しずつ慣れていった。何かうまくできなかった時先輩に叱られたりしたが、その厳しい指導のおかげで色々なことを勉強した。

私は毎日の仕事やリーダーの仕事で周りの人とのやりとりが多かったが、親しい友達ができなかった。日本人の同僚ともよく雑談はしたがどこかへ一緒に遊びに行くほど親しくはなかった。研修生同士の中でも親しい友達がいなかった。私はリーダーだったがときには他の研修生と口げんかをしたりした。100人以上の女性が一緒に暮らしているから、研修生同士の口げんかは日常茶飯事だった。しかし口げんかが他の研修生と仲良くなれなかった理由ではない。私は口げんか程度で怒ったりしなかった。そもそもそういう性格ではないし、リーダーとして毎日疲れてしまって、もめごとばかりを気にする余裕もない。

研修生の大多数は私より10歳以上年上で共通の話題を持っていなかった。同世代の研修生もいたが彼女たちの趣味や考えなどは私と違っていたのでなかなか親しくなれなかった。初めの頃はみんなと同じようにしようと思ってあまり興味がない番組を見たりして努力したが、考えや価値観などの違いが多すぎたので彼女らの中に溶け込めなかった。いや、溶け込めなかったというより、むしろ私は彼女らと一緒になりたくなかった。この気持ちが他の研修生と仲良くなれなかった本当の理由だった。

私は自分でできることなら必ず自分でやるタイプなので、何でも他人に助けを求める人が本当に嫌いだ。そして一部の研修生のやったことを見て、私はほんとに耐えられないほどムカついた。私たちの住んでいる寮には洗濯機があった。それはみんなで使っているものだ。しかし

一部の人はいつでも自分が使えるように、洗濯機の中に洗濯物を何も入れずに常に使用中の状態にしていた。私はリーダーとしての責任感を持っているが、彼女らのやったことを見て、責任感とは一切関係なく個人的にもその考え方は本当に理解できなかった。もしリーダーではなかったら、そのような事を見たらムカつきすぎて彼女らと口げんかをするかもしれないが、私はリーダーとして自分の感情をコントロールしなければならない。いくらムカついても我慢しなければならない。その結果、私は彼女らと一緒にいるよりも一人のほうが好きになった。だから暇なとき彼女らと遊んだり雑談したりするより、日本語を勉強するほうが好きだった。

7.4.2. 友達ができた

私の「一人」暮らしは来日1年半頃に変わってきた。そのとき新しく入った研修生Pさん[8)]と仲のいい友達になった。私より1歳上のPさんはとても優しい人だ。いつも気立てが良くて、他の人の手伝いをよくしており、優しいお母さんのような感じだった。その優しさはPさんと友達になった一つの理由だったが、重要な理由ではなかった。周りの他の研修生は悪い人ばかりではないし、優しい人がいないわけではなかった。しかし、私は彼女らとは友達にはなれなかった。Pさんとだけ仲良くなった一つの理由は直感かもしれない。私は彼女には最初の頃から好印象を持っていた。そしてPさんは私と違って日本語学習にも読書にも映画を見ることにも興味がなかったが、私の言っていることをよく理解してくれた。二人とも旅行、食べ物に興味を持っているから、仕事が終わってから一緒に食事をしたり、買い物をしたりしていた。それから、3年目の時、休みの日に一緒に会社より少し離れている都市に遊びに行ったことも何回かあった。

そうとはいえ、私とPさんは毎日一緒に行動しているわけではない。私と彼女は出勤時間がずれている場合が多かった。それに加えて、それぞれの事情もあるから、二人で一緒に話したり、遊んだりする時間はそれほど多くはなかった。

7.5. 将来について

日本にいた3年間、いろいろなことを体験して楽しかった。人間は自分の慣れている環境から離れてはじめて、成長することが可能になると私は感じた。家を離れ日本に来て、私はたくさんのことを学んできた。そしていくら日本語が上達しても、言語以外の知識を持っていないと、他人との会話はなかなか続かないと私は思った。3年間日本語の言語知識以外に、様々な学習ができたことで、自分の知識も増えたし、視野も広がった。例えば私は周りの日本人が鯛を食べるのを見て、日本人はなぜこんなに鯛が好きなのか、分からなかった。日本の民俗に関する本を読んで、日本人は鯛が好きなのは「めでたい」の発音に近くて、吉の意味があるから

だと分かってきた。「なるほど」と思った瞬間、とても嬉しかった。

3年間の日本語学習を通じて、私は自分が持っている「可能性」を感じた。日本に行く前の私は何かを学ぶ時よく2、3日で諦めてしまう子だった。日本にいた3年間、日本語の学習が続けられたから、中国に帰って何か学びたいことがあったら、自分はなんとなくできるだろうと思った。それだけではなく、3年間の日本語の勉強をすることで、自分が自由になったと思った。異国に行ったら、共通言語がないとコミュニケーションもできないし、やりたいこともできなくて不自由だと私は思う。日本語を勉強して、自分の言いたいことをいえるようになり、読みたいものを読めるようになって、嬉しかった。そしてこのような自分は自由だと思った。それだけではなく、日本語を勉強することで、自分の将来選べる道も増えた。私は日本語学習に興味があるから勉強していたが、いつの間にか将来日本語で食べていければいいなあという考えも生まれた。もちろん、将来必ず日本語を使う仕事をするという意味ではなく、ただ自分がそういう仕事をしたい時に自分の日本語能力なら必ず仕事を見つけられると考えるだけだった。

日本にいた3年間、いろいろな夢もできた。日本の大学に進学する夢、欧米に留学する夢、日本語の翻訳家になる夢、などなど。どの夢も実現できずに中国に戻ってきたが悔しくはしなかった。中国に帰って5ヶ月たったが、まだ完全には慣れていない気がする。日本にいた時日本人と話すと「日本語がお上手ですね」、「すごいですね」とよく言われた。それは本音か建て前かわからないが、自分は達成感を感じた。しかし中国に帰ってきた私はただの普通の人間だ。日本語ができるとはいえ、日常生活でみんな中国語で話しているから、たいしたことではない。それから日本では嫌いな人やいやなことにあったら、自分の世界に閉じこもり避けることができたが、帰ってきてから、いやでも直面しなければならないことがたくさんあった。

心理的にはまだ不安定だが、撮影やポールダンスなど自分が興味を持っていることにチャレンジして面白かった。将来について店をもつことや日本に留学することなどいくつかの考えを持っているが、まだ決めていない。しかし、どの道を選んでも、いろいろなことにチャンレジして生きていきたい。

8. 考察

第7節では中国人研修生Cさんが仕事をしながらの日本語学習の実態を描いた。本節は第7節の記述に基づき、Cさんの日本語学習の二つの特徴から彼女の日本語学習アプローチを考察したいと思う。

8.1. 自分なりの日本語学習

「自律学習」とは、学習者が教師に頼らずに、その成否については自分の責任で、教材、学習時間を開始する時間、学習にかける時間、学習の方法などを自分で選択して行う学習のことである（大木・田地野・浅田・高橋, 2004, p. 88）。Cさんの日本語学習はこれにあたる。Cさんは日本語の勉強に関することを自分で決め、学習時間、使うリソース、学習の方法など、自分で選択して自分なりに学習活動を行った。C さんは自分の日本語学習の主体であり、その日本語学習は自律学習だといえる。そしてCさんの自律学習においてもっとも特徴的なのは「自分なりに」という点だと考える。

週に1回2時間足らずの授業を除き、Cさんの学習の全ては自分なりに行ったと言える。自分の好みに合わせ、アニメ、漫画、ドラマ、小説、歴史の本、図書館などをリソースに選んだことはもちろん、リソースの使い方も学習のやり方も最初から最後まで自分なりであった。

中国では日本語を勉強する学習者にとっては目的や趣味などを問わずに能力試験の前に大量の試験問題集や模擬試験問題集をしたり文法、読解、聴解の練習をしたり単語帳を暗記したりするのが普通であるが、C さんはそういう「普通」みんなやっている方法を使わなかった。過去の試験問題でも模擬試験問題でも、「最初の問題から最後までやりきったことはほとんどなかった」し、単語も「一日一ページに集中して覚えたこともあるし一日に複数のページを読み一個も覚えていなかった」こともあった。それに加えて、C さんはほぼ毎日日本語の勉強を続けたが、毎日○○をしなければならないという具体的な計画は持たずに自分のペースで毎日の学習活動を決めた。

「決められた人生が嫌い」、「自分なりに楽しく生きていければそれで十分だ」という考えを持っているCさんだから自分なりに学習活動を行ったのも当たり前なことだと言えるかもしれないが、それだけではないと思う。自分なりの学習は研修生であるCさんの唯一の選択だと考える。大学や日本語学校などで勉強する学生と違い、研修生として来日したCさんは「仕事」という本業を持っている。研修生である彼女は日本語を勉強したいなら、本業である「仕事」以外の時間にするしかないし、「仕事」の都合に従い自分の学習を調整しなければならない。そして、人間として自分の体力、精神的状態も考えなければならない。全ての要素を考え、最も効率よく日本語を勉強することができるのは日常生活で自分なりに行う学習活動しかないだろう。

だから、C さんの自分なりの自律学習は彼女の性格に合う学習であり、研修生である彼女に最もふさわしい学習でもあると考える。

8.2. 複数の役割を持っている日本語学習

Cさんの日本語学習は単なる日本語を勉強するものではない。日本語学習は彼女の研修生活において、複数の意味を持っていたと考えられる。

まず日本語学習をすることで、Cさんのネガティブな情緒を変えたと考えている。3年間の研修生活でCさんは「ときには他の研修生と口げんかをした」こともあるし、「一部の研修生のやったことを見てほんとに耐えられないほどムカついた」こともある。そして「リーダーとして毎日疲れてしまっ」たり、「同じ仕事を繰り返す生活がつまらないと感じた」りもした。これらのネガティブな情緒がずっとたまっているとおそらくストレスになるだろう。しかし、Cさんの場合、そのようにはならなかった。なぜならなかったかというと、一番大切な理由はCさんが日本語学習を行ったということである。

Cさんの自分なりの日本語学習では、アニメ、漫画、ドラマ、小説、歴史の本など様々なリソースを使った。「本を読むのが好き」、「ドラマでもアニメ漫画でも個人の趣味として好き」なCさんにとってこのような学習は「楽しかった」。日本語学習から楽しさを感じたことで、疲れやつまらないなどのネガティブな情緒を持っているCさんは癒されたのではないか。

第7節のストーリーから見ると、Cさんは仕事以外の時間にひとりぼっちの場合が多かった。しかし彼女は寂しいと思わなかった。Cさんは「初めての時にはみんなと同じようにしようと思って、あまり興味がない番組を見たりして努力した」。しかし、「考えや価値観などの違いが多すぎたので」Cさんは「彼女らの中に溶け込めなかった」し、「彼女らと一緒になりたくなかった」。この時点でCさんは周りの人との人間関係をうまく構築できなかったと言っても過言ではない。しかしながら、Cさんは「暇なとき彼女らと遊んだり雑談したりするより」、「日本語を勉強するほうが好き」である。つまり、Cさんは人間関係での失敗を日本語学習を通じて補ったのではないだろうか。

さらに、日本語学習はCさんに自由を与えた。研修生であるCさんは不自由な環境にいた。彼女が言ったように、研修生である自分は外に出るのがなかなか難しい。「会社の所在地以外の場所に行きたいなら、電車で30分以内でいけるところでも会社に申請を出さなければならない」。「自分が監視されているみたいな」不自由な環境にいるCさんは「3年間の日本語の勉強をすることで、自分が自由になった」と思った。「日本語を勉強して、自分の言いたいことをいえるようになり、読みたいものを読めるようになって、嬉しかった。そしてこのような自分は自由だ」と彼女は思った。つまり、身体の自由が制限されていたCさんは日本語を勉強することで精神的な面での自由を得たと考えられる。

またCさんは3年間の日本語学習から自信も得た。日本語学習することでCさんは「自分が持っている「可能性」を感じた」。彼女は「日本語の学習が続けられたから、中国に帰って何か

学びたいことがあったら、自分はなんとなくできるだろう」と思った。つまり、C さんは日本語学習から将来に対する自信を得た。それだけではなく、C さんに日本の大学に進学するなどの夢ができたのも日本語学習を通して自信を得たからだろう。

要するに、C さんの日本語学習は、言語知識の獲得と同時に、研修生活を精神的に支える働きもあったと言える。日本語を勉強することで、C さんは仕事で体験できない楽しさを得て、人間関係での失敗を補った。それから日本語ができることでCさんは自由を感じた。日本語の学習で得た楽しさ、自由はCさんの辛い研修生活を支える支柱のような存在だと言っても過言ではないと思う。

9. おわりに

本稿は第7節で中国人研修生Cさんは仕事をしながらどのように日本語を勉強したのかをストーリーで描いた。そして第8節ではCさんの日本語学習の二つの特徴から彼女の日本語学習アプローチを考察した。考察に基づき、下記の結論を得た。

① 研修生の日本語学習において、自分なりに自律学習を行うことは学習の継続と上達への重要な鍵である。
② 日本語学習には、研修生活の中のストレスの軽減、精神的自由の獲得、将来への自信を育てるなどの意義がある。

C さんは自分なりの学習ができたから、日本語学習を諦めずに 3 年間日本語学習を続けられた。また、自分なりの学習をすることで、C さんは会社の日本語教室で触れられない日本の文化や歴史などの非言語知識を学んだ。このような学習はCさんの日本語学習の上達に非常に役立ったと考えられる。C さんだけではなく、自分なりの学習は研修生全体に相応しいだろう。場所、時間及び人身の自由が制限される環境にいる研修生にとっては、決まった内容とスケジュールで行われる日本語教室の学習より、自分のレベル・都合・興味に合わせた自分なりの学習の方が続きやすくて、日本語の上達により近づきやすいだろうと考えられるからだ。

またCさんは日本語学習をすることで、言語知識以外に、楽しさや自由などを得た。楽しさや自由などのようなものは辛い研修生活を続けるために不可欠なものだと言える。研修生全員がCさんのようになれるわけはないが、日本語学習は単なる言語を学ぶものではなく、様々な意味がその中から生まれるということを研修生全員に認識させれば、彼らの学習意欲が強くなるだろう。また、辛い研修生活も少しでも楽になるだろう。

しかし、教育現場で「自分なりに」勉強する方法が適していることを研修生に認識させるのは一つの難問かもしれない。Cさんのような研修生は恐らく研修生の中で特別な存在だろう。本稿ではこの問題の解決策についての議論ができなかった。これは今後の課題としたい。さらに、前提条件として、研修生の教育現場の教育者に「自分なりに」勉強する方法を認めさせなければならない。自分なりに勉強できるためには様々な学習リソースが必要となる。それらのリソースを簡単に入手できるように、教育関係者のサポートも必要である。本稿がこれらの目的を達成するための第一歩になれば幸いである。

注

1） JITCO:財団法人国際研修協力機構（Japan International Training Cooperation Organization）の略称で、1991年に設立された、法務、外務、厚生労働、経済産業、国土交通の5省共管の公益法人である。

2）「研修」の在留資格は出入国管理及び難民認定法で「本邦の公私の機関により受け入れられて行う技術、技能又は知識を習得する活動」と定められている。

3） 技能実習制度は、研修期間と合わせて最長3年間の期間において、研修生が研修により修得した技術・技能・知識を雇用関係の下、より実践的かつ実務的に習熟させるというものである。

4） 強制貯金・パスポート取り上げ・研修生賃金の違法使用:第1次もしくは第2次受け入れ機関が、逃亡防止の名目でパスポートや外国人登録証を取り上げてしまうことが多い。そして、強制貯金に使われる通帳は、本人の名義で作られるが、通帳も銀行印も受け入れ機関が違法に「保管」している。外国人研修生が逃亡した場合、この通帳が悪用され、送り出し機関へ賠償金・違約金として送金されたり、受け入れ機関が引き出して使ってしまうこともある。

5） 日本語能力試験（Japanese Language Proficiency Test、略称JLPT、日能試）は、財団法人日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金が主催の、日本語を母語としない人を対象に日本語能力を認定する検定試験である。日本を含め世界65カ国・地域（2013年（平成25年））で実施しており、日本語を母語としない人を対象とした日本語の試験としては最も受験者の多い試験である。最上級のN1から最下級のN5まで5段階のレベルがある。一部の受験地を除き、7月上旬と12月上旬の年2回試験が実施されている。（Wikipediaより）

6） ここの［当時］はCさんが研修生1年目の時をさす。

7） 3年の研修が終わってから：研修生として、研修が終わったら帰国しなければならないが、Cさんによると、帰国する前に大学の入学試験に合格して、在留資格を留学に変更すれば、帰国しなくてもいいそうである。

8） Pさんという呼び方は筆者が本稿を書くときにつけたものである。協力者CさんはPさんをいうときに全て「彼女」で言っていた。

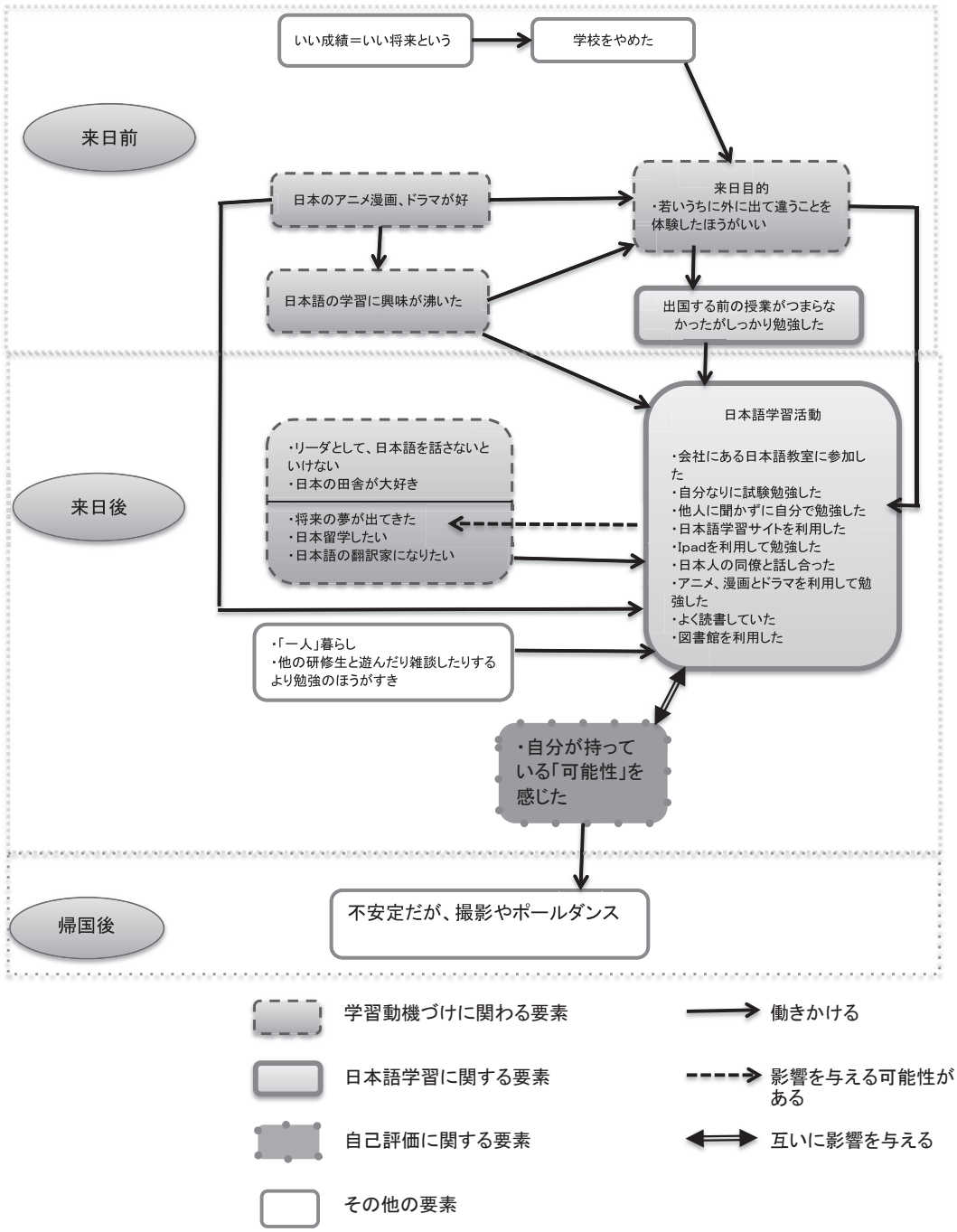
参考文献

赤塚恵子（2005）「技術研修生日本語指導における実践の構造化をめざして：A社における日本語指導の取り組みの実態より問題点を探る（1）」鈴鹿国際大学（編）『鈴鹿国際大学紀要』2, pp.243-261.

赤塚恵子（2008）「技術研修生日本語指導における実践の構造化をめざして―日本語学校と受け入れ企業の日本語指導評価の視点に対する意識のずれから、日本語学習のあり方を探る（2）A社における技術研修生の日

本語学習の結果を通して」鈴鹿国際大学（編）『鈴鹿国際大学紀要』15, pp.149-161.
大木充・田地野彰・浅田健太朗・高橋克欣（2004）「自律学習と学習者の動機づけに対するCALL の有効性―自律学習支援環境の構築に向けて―」『フランス語教育』32, pp.87-100.
御舘久里恵（2007）『外国人研修生の日本語習得と，受け入れ企業や地域との関わり』（平成17～18年度科学研究費補助金［若手研究（B）］研究成果報告書）.
葛文綺（2007）『中国人留学生・研修生の異文化適応』広島：溪水社.
佐々木倫子（2006）「パラダイムシフト再考」国立国語研究所（編）『日本語教育の新たな文脈－ 学習環境,接触場面,コミュニケーションの多様性』（pp.259-282）東京：アルク
佐藤尚子（2000）「中国人技術研修生の日本語研修：東京商工会議所委託プログラムに参加して」『千葉大学留学生センター紀要』l, pp.133-145.
杉山明（1999）「中国人研修生への日本語指導レポートとその考察」『津山工業高等専門学校紀要』41, pp.159-166.
池上摩希子ら（1998）『日本語教育重要用語1000：Japanese language resource book 』東京:バベル・プレス
保坂亨・中澤潤・大野木裕明（2000）『心理学マニュアル面接法』京都:北大路書房.
S・B・メリアム（2004）『質的調査法入門：教育における調査法とケース・スタディ』堀薫夫・久保真人・成島美弥（訳）京都:ミネルヴァ書房.
S・B・メリアム, E・L・シンプソン（2010）『調査研究法ガイドブック:教育における調査のデザインと実施・報告』堀薫夫（監訳）京都:ミネルヴァ書房.
梁学慧（2007）「中国人技術研修生派遣前の日本語教育」重慶大学外国語語学及び応用言語学2007年修士卒業論文.

〈HP〉
JITCO「外国人研修・技能実習制度概説」http://www.jitco.or.jp/download/data/titp/2010/part01.pdf
「技能実習制度の見直しについて」
http://www8.cao.go.jp/kisei-kaikaku/kaigi/meeting/2013/wg2/sogyo/131010/item2-1.pdf
「中国网」2010.07.23
http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2010-07/23/content_20558970_10.htm

（博士後期課程学生）
（2015年8月20日受付）
（2015年10月6日修正版受付）
（2015年11月9日再修正版受付）
（2015年11月22日掲載決定）

付録　Cさんの日本語学習アプローチ